

柴田恵子 芸術振興基金 高知若手美術作家育成事業 合同企画展

本事業は、高知で活動する若手美術作家を対象に、制作のモチベーションを高め、自身の今後の目標や課題発見の場として「美術家の芽」を応援するもので、高知市の実業家 柴田恵子氏の寄附により実施する展覧会です。
出品作家には、壁3面で構成したコの字型の展示スペース（間口7m×奥行3.5m×天井高6m）の空間を使った展示プランを考え、会場のBILBOギャラリーにて自由に表現していただきます。映像・立体・平面・インスタレーションなどジャンルを問わず、19歳～44歳の高知県出身者から応募された29の展示プランのうち、一次・二次審査を通過した10の展示プランを展示室内に実現します。

一次審査

高知県立美術館
主任学芸員 塚本麻莉

公益財団法人高知市文化振興事業団
企画事業課長 吉村知恵

審査員

二次／最終審査

女子美術大学
芸術学部 アート・デザイン表現学科
クリエイティブ・プロデュース表現領域

教授 日沼禎子



石見陽奈

1986年 生まれ
高知市出身

あの日に帰れない

子どもと接していると、幼い頃の記憶が突然蘇ることがある。その感覚を絵にしたいくて子どもと同じ

目線で風景を見てみようとする度に、自分の眼に映るものや描く絵が嘘っぽく感じて虚しくなる。それならいっそ、その「見えなさ」を絵にすることはできるだろうか。何度も薄目を開けて形を捉えようとしてみても、モヤがかかっていたり一瞬だったり。体内に静かに残る過去と、見えている今が混ざる。そんな掴むことのできない風景を描いてみたいと思う。



太田 糸

1985年 生まれ
高知市出身

触れる、近く、在る

人々が能動的に触れて感じとることを目的とし、受動的な生活に慣れ親しんだ我々の五感を蒸留する場

として土佐和紙でのインスタレーションをはじめとした展示を行う。人々の生活が数値化され、存在がデジタル上で架空化される今、私達はあらゆる感情を持ち思考する生物として、非効率で生産性が乏しいことも、痛みも苦しみも怒りも後悔も生きている限りそれらは醜くも美しい生命の喜びであると、真正面から向き合いたい。



刈谷舞花

1999年 生まれ
高知市出身

Every Day a Good Day

私は、日々の生活の中で心が満たされたときに、生きていることの面白さや喜びを感じます。それは、自分の中になかったものに出会った時や、何かを愛おしいと思った時、何かによって考えさせられた時、わくわくした時など、さまざまにあります。そのような「心が満たされた瞬間」を、絵を描くことを通じて観察し、表現することを試んでいます。



とおちかあきこ

1986年 生まれ
四万十市出身

みんな話 ～みんなのはなし～

“だれか”と“なにか”について短いおはなしを展示する。

その小石は、恐竜がドタドタ走った衝撃で大きな岩がくずれたやつ。長い時間をかけて草原を転がり、鳥に運ばれ、荷物にまぎれて船にも乗って、隣のおじさんのサンダルの上に挟まってきて、それから私が蹴とばした！
そんな風に、この世界の全てのものにある物語を、ひとつひとつ感じられたら。にやにやして、ぶるぶる細胞がふるえて、びかびかの自分になれるかもしれない。



Toposgraphia

上村菜々子
1988年 生まれ・香南市出身
杉本春奈
1986年 生まれ・香美市出身

Introspection

本作は自分の部屋の中にある「変なもの」を観察する行為から、自分を構成する存在を知ることを出発点とする。
奇妙なケーキや、萎れていく花の様子など、日常の中で生まれる違和感を通じて、内と外、自己と他者の境界が揺らぐ感覚を提示する。自分の気持ちや考えを内省して観察すること「内観／introspection」をテーマに、内面への視線が外界と響き合う瞬間をインスタレーションとして表現する。



中島海斗

2000年 生まれ
室戸市出身

場－14

地の自然物で造形をすること。それは場を造ること。
高知を離れ、東京での生活。
都会での暮らしは刺激的な一方、寂しさと苦しさを感じた。
都市での消耗と郷愁。しかし場は動かない。
私は都市に、故郷を生み出す必要があった。
高知の和紙と漆喰は、地の自然から生まれた。
海はどこまでも続く。山は静かに佇む。記憶が帰ってくる。
愛する場所を造ること。
これは揺るがぬ場所性に対する新たな試みである。



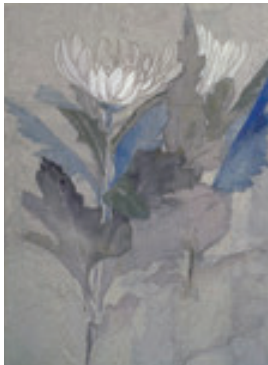
大場真美

1992年 生まれ
香美市出身

波の轍

「砂浜」をモチーフとした作品を展示いたします。

砂浜に打ち寄せる波が織りなす砂の表情に着目し、日本画画材を用いて制作しています。題材に取り組むきっかけは、ある日、浜辺で鳥の死骸が分解され砂と混ざり合う様子を目の当たりにした体験でした。その光景を通し、砂の一粒一粒が「命の形」でもあるという思いが芽生えました。こうした思いをもとに制作した作品を集め、私が体験したあの日の情景を展示空間として再構成します。



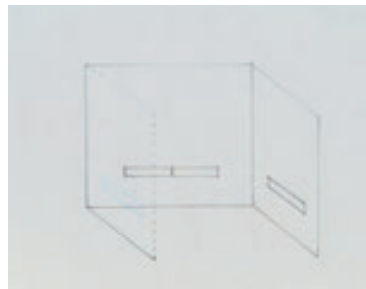
花織

1992年 生まれ
高知市出身

白暮にて歓楽す

日中、太陽で見えないけれど、星はある。肉眼では、日中観測することは難しい。あの世があるのか、それともそのまま終わりなのか、

生きている間に答えが出ることは、おそらくない。ひょっとしたら、あの世は星のようなものなのかもしれない。
遠くて近いところから祭りの音がきこえてくる。
生きることゆくことどちらもことほぐ祭りの音。あらゆる次元が混在するこの世、この世界、この土地を用い、すべてのものへ賛歌を捧げよう。



平野史恵

1987年 生まれ
いの町出身

景色

知人が体調を崩したことがきっかけで絵葉書を送るようになった。楽しめるものをと描いたのが季節の果実や野菜、花だった。自分でびっくりするほど、すごく平凡だと思った。けれど何を描くか重要ではないと思ったのは初めてだった。描くことで生じる風景があるような。今身近な人に向けて描くときに、すごくありきたりな、けれど目を閉じてでも思い出せる記憶の中にあり続けるものを空間として制作してみたい。ただ花びらを描いてみることで何が見えるのか。



松田 栞和

2005年 生まれ
土佐市出身

feel

例えば同じ時間に同じ車両の電車に運ばれている人たちも

それぞれの生活があって、同じ時間を生きているのに同じ人生はひとつもない。何を考えているのか、どういう暮らしを送っているのか、記憶、後悔、悩み、好きな食べ物、嫌いな人。永遠じゃない命を消費しながら生きていることを感じたい。絵は生きていないけれど私の描く絵では命を感じたい。生身の人と対面したときの特別な空気を感じたい。